

Die (友情) Freundschaft

事務局：
〒010-1632 秋田市新屋大川町 12-3
秋田公立美術大学 野村研究室
<http://www.jdg-akita.org>
(018)888-8110
nomura@akibi.ac.jp

秋田市・パッサウ市姉妹都市提携 40 周年記念行事を振り返る 日独協会の関わりと今後の課題

会長 添野 武彦



令和6年8月5日から8日までの4日間、秋田市・パッサウ市姉妹都市提携 40 周年を記念して、パッサウ市から同市副市長アーミン・ディックル氏をはじめとする総勢 39 名のパッサウ市民の方々が秋田市にいらっしゃった。その構成は、7 名の市議会議員を含む市当局者、パッサウ日独協会会長ノルベルト・パルーザ氏に引率された多数の市民交流団、及び記念演奏会のための音楽関係者などであった。

前回、35 周年記念で私共がパッサウ市を訪問した際の日玉行事は、秋田市民有志とパッサウ市・聖シュテファン大聖堂合唱団による【シューベルト G-Dur ミサ曲】の合同合唱であった。それに対して今回は、入念な準備を経て昨年に実施された両市のプロ写真家による【プロ写真家から見た両市の日常生活】と題した写真集作成と、その展示会実施が中心的企画であった。これはパッサウ日独協会会長パルーザ氏の提案によるところが大である、と仄聞している。更にもう一つの企画は、プロ演奏家による【金管五重奏コンサート】である。秋田市民も共演の形でプログラム的一端を担った。即ち、演奏会場のアトリオン音楽ホールを拠点とし活動している《アトリオン少年少女合唱団》が演奏者の伴奏により共演した事と、日独協会会員有志を含む秋田市民の独自合唱演奏を加えた事であった。これらの企画はいずれも評判が良く、大成功であった。

更に、遠来の友人たちにとって何よりも秋田市訪問が深く印象に残ったであろうことが、伝統行事である《竿灯祭り》を觀賞して貰った事ではなかろうか。長年のお付き合いにも拘らず、竿灯祭をお見せするのが初めてだったというのは、意外な盲点であった。このような魅力溢れる企画が盛り沢山で、訪問団はドイツからの長旅の疲労も抜け切らないまま、強行日程で秋田の滞在期間を過ごされた。私は、さぞお疲れのことではなかったのではないかと危惧している。

私は、これら記念行事実現のため尽力された秋田日独協会会員各位、パッサウ市日独協会役員各位、並び

に両市当局の関係各位、就中、獅子奮迅のご努力をされたパルーザ会長には、深甚の感謝を申し上げたい。

この様に多くの方々のご協力により、草の根的市民交流が一層活発になる事は嬉しい事である。しかしその反面、主体が市当局でありながら、折角の写真集が予算不足で一般市民向けに頒布販売できなかった事。写真展示会開催期間が極めて短く、多くの市民に十分に楽しんでもらえなかった事。訪問団の市内移動手段としてバスなどが借り切れない等、幾つかの課題も明らかになった。

特に、後日、姉妹都市フォーラムが開催された折にはあるが、パッサウ市との姉妹都市提携の当初期を知る一市民から、パッサウ市を撮影した写真について詰問されたということが、私共の協会理事の一人から報告され、心に刺さった：そもそもこの姉妹都市提携は、故高田市長さんの並々ならぬご尽力により実現したのである。提携実現後間もなく、友好の証として秋田市民の寄付によりパッサウ市に五百本の桜が植樹されたのだが、『写真にはその移植後の現状が映されていない』という事を問題にされていたという。抗議された方は、当時の新聞記事の切り抜きを持参されていたとのことであった。

私共・日独協会としても、派遣された草薙先生に、パッサウ市に桜の記念植樹が行われた経緯を説明すべきであったし、秋田市からも派遣に先立ち、姉妹都市提携に至った歴史をお知らせすべきであったと反省している。

パッサウでの写真展は10月27日から12月15日まで開催された。その印象について、パッサウ市で刊行されている日刊紙には、今回の写真展開催に関連して、姉妹都市提携の経緯に軽く触れた記事が掲載されている。

こうである： Der verliebte Bürgermeister und die Folgen 『(パッサウに)惚れ込んだ一市長さんの

思いとその結果』とする見出しの記事である。K. Ditté氏の撮影した海岸に手を繋いで立つ二人の児童像と、草薙氏撮影の橋の裏面に反射する光の模様の写真を引用しての記事である。大変見応えのある写真展であったとして、解説が加えられている。展示会開催初日の翌日の記事であった。

また、過去には秋田市を記念して、パッサウ市内に【秋田通り】と言う名を冠した道路を決定したが、市郊外の余り人通りの多くない地域のそれに命名するのは、些か問題があるのではないかと、市議会で討論された記事が掲載されたこともあった。

この様に、良かれ悪しかれ秋田市側からの動きがあった時には、地方紙はそれなりに大きく紙面を割いて記事を掲載してくれていた。私共、日独協会も更に積極的に魁新報やTV会社に働きかけて、姉妹都市交流をもっと取り上げてもらう必要があると反省している。

その反面、秋田市内に【パッサウ】と明記されている場所などはあるのだろうか？市役所構内の【友情の鐘】と、中央郵便局の【パッサウ市との姉妹都市】と彫られた接客カウンターの腰板数枚のみである。もう少しパッサウを連想（或いは記念）させる箇所・物などに名を残す事も考えても良いのではないかと思う。

姉妹都市提携は、成立までに大きな努力が必要であり、その維持にも持続する情熱と経済的な裏付けが必要な事は明らかである。確かにこれは両市間の契約であり、行政が主体となる事案ではある。私たち日独協会或いは独日協会は、飽くまでもこの良好な関係が未長く続く事を切望するものである。そのために、周年行事などが企画される際には、その実施に向け喜んで協力・助力する立場をとっている。その時の活動が協会会員間の親睦を深め、市当局との円滑な意思疎通にも繋がると確信している。従って市との関係は、将に車の両輪の関係であるべきであろう。

私たち日独協会会員にとっての姉妹都市交流は、ドイツへの関心を深める場である事は論を俟たない。従

来通り、5年毎に相互に交流する事は、分かり易い行事である。しかし、これに満足せず、35周年、40周年の際に実行された様に、何かテーマを持って、お互いに訪問するのが有意義ではないかと考える。単なる物見遊山にはしたくないものである。

だが、日独協会会員であることが、経済的な負担となるばかりでは拙い。35周年にパッサウに出かけた折、パッサウ市側では【秋田デー】を企画し、市内の商業施設広場を提供してくれていた。その際は残念ながら、こちら側からの売り込みが極めて消極的ではなかったかと感じている。今、欧州では日本食に異常な人気が集まっている。それに合う秋田の銘酒とか、料理方法。秋田市の観光なども宣伝すべきと思う。必ずしも協会会員限定ではなく、広く県内に有志を募ればよろしいのではないだろうか？但し、日独協会の活動を経済的な面に限定するのは、好ましくないと考える。

今回の写真を媒体とした様な芸術は勿論、スポーツ、音楽、大学間の交流、更には市立病院をはじめとする市内病院群とパッサウ市立病院間の交流など、多岐にわたる文化的交流を目指すのも大切ではないかと、誇大な夢を膨らませるこの頃である。

今後の交流のあり方を皆さんで大いに語りあい、今年も日独協会の活動を楽しみたいものである。

皆さま、今年も宜しくお祈りします！



竿灯祭りでのパルーザ会長

《会員のご子息よりご寄稿いただきました》

ドイツ日記 後編

平野 亜子

私は、現在、一昨年（2023年）の8月から約10ヶ月の留学生活を終えて帰国し、改めて気づいた日本の美しさと文化の魅力を感じながら生活しています。今回は、ドイツ留学を通して変化した私の内面と忘れら

れない景色についてご報告いたします。

私の大きな内面の変化の一つ目は、何事にも積極的に挑戦し、未来を開拓していくサバイバル精神が身についたことです。全てが自分にとって新しいもので溢れている異国の地での生活は、毎日が新鮮で挑戦でした。多言語を使ってコミュニケーションを取ること、一人で旅をすること、問題を解決すること、それら

すべての経験がその瞬間瞬間で私を強くしてくれました。自信をつけていった私は、自ら積極的にやりたいことに挑戦したことで、自分の人生を自分の力で切り開いていくということの意味や方法を学ぶことができました。

二つ目は、モノや娯楽に対する考え方です。以前私はとても流行に左右され、モノやお洋服を購入する際には常に最新のものを意識し、休みたい時や気分転換したい時にも、買い物やスマホを見るなど、時間とお金の浪費をしていました。しかし、ドイツ人の徹底したエコ意識や自然の中で過ごすことを好む国民性に触れたことで、自分の生活がいかに利便化されたものになり、物に溢れているようで、実は飢えていたのかということに気づくことができました。今は、新しいものを追い求めるのではなく、今持っている本当に自分が必要とするものを大切に、自然の中で過ごすことや体験・経験を積むことを心がけています。そうすることで、少し生活が豊かになった気がします。

そして三つ目の変化は進路選択の考え方です。ドイツの教育制度は日本と異なり、13歳頃から大学進学をするのかなど自分の将来を考える必要があります。つまり、日本では自分のやりたいことを見つけるために大学に進学する人が多いですが、ドイツの人はそれより前に自分のやりたいことを見つけ、それぞれの道を歩んでいます。もちろん国による制度の違いがあるため容易に比較することは難しいですが、私が出会ったファミリーや友達は大学に行っていない、もしくは行かない人が多く、若くして社会に出て仕事をしていました。そんな姿を見て、私も早く社会に出て活躍したいと考えるようにもなりました。彼らから何度も大学で何をしたいのか、将来のビジョンをどう描いているのか質問されたことで、自分の将来の姿を真剣に考えることができたので、大変に感謝しています。

次に、私がドイツで訪れた地で特に印象に残っている場所を二ヶ所ご紹介します。一つ目はドイツの南に位置するシュヴァンガウにあるノイシュヴァンシュタイン城です。私が滞在したのはまだ雪が少し残った3月の下旬でした。まるでおとぎ話に出てきそうなお城と幻想的な雪、伝統的な家屋が並ぶ街並み、美しいアルプス山脈に囲まれた景色は、まさに想像していたドイツそのものでした。朝早く起きてホテルを出て、近くにある湖へ白鳥に会いに行ったことも良い思い出です。もう一つはベルリンから電車で30分ほどの

ところにあるブランデンブルク州の首都ポツダムです。ポツダムにある複数の宮殿と庭園は世界遺産に登録されており、ドイツのプロイセン時代の歴史を感じることができます。繊細けどずっしりと佇む建築物とそれらをさらに引き立たせる整えられた庭園は、言葉に表せられないほど美しく、ずっとここにいたいと思わせるものでした。是非みなさんにもドイツを訪れた際には一度は足を運んでいただきたいです。



ノイシュヴァンシュタイン城



ポツダム サンスーシ宮殿

最後になりましたが、長期留学を通して異国の地で生活をし、異なる文化や考え方を学べた経験は、私を成長させてくれました。その場所としてドイツを選択し、魅力的な文化や人に出会えたことは私の人生の財産です。この場をお借りして、今回のドイツ留学を通して支えてくださったすべての方々に感謝申し上げます。

Ich möchte Ihnen allen aus tiefstem Herzen danken.



職場体験でお世話になった保育園の子供達と

《秋田市・パッサウ市姉妹都市提携 40 周年記念行事》

秋田市・パッサウ市姉妹都市提携 40 周年を記念して、パッサウ市から 39 名の交流団が秋田市を訪れました。巻頭言に会長がその詳細を語ってくださっていますが、改めまして 2024 年 8 月 5 日～8 日の行事をご紹介します。

<8 月 5 日> 秋田市到着 秋田公立美術大学を見学



大学内の見学



漆工芸体験：お猪口・お箸の制作
(講師：熊谷教授)

<8 月 5 日> 秋田日独協会主催歓迎晩餐会開催 於：千秋亭



中央：ノルベルト・パルーザ独日協会会長
左：通訳の千里さん（秋田市出身、パッサウ在住）



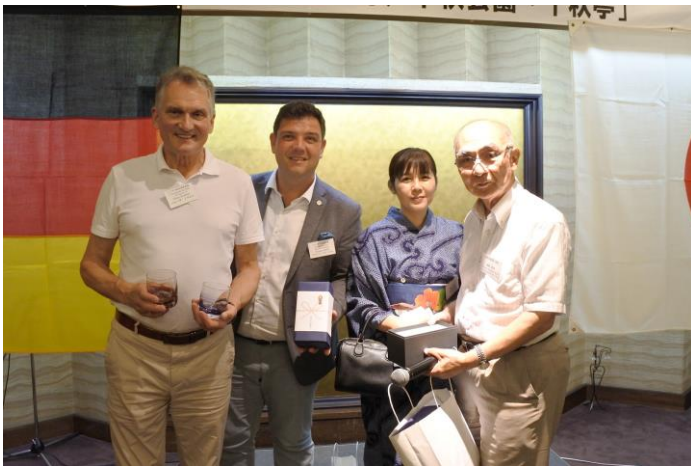
パッサウ市交流団 39 名
日独協会会員および関係者 48 名



なまはげ太鼓（真山おろし）“男鹿っ鼓”



なまはげ太鼓鑑賞後に写真撮影



記念品交換



市民交流団との合唱による交流
「浜辺の歌」「ローレライ」「リリー・マルレーン」

<8月6日> 日本料理教室開催 講師は料理研究家の高堂路子さん



料理メニュー：おにぎり、天然だしのお味噌汁、味噌玉、茹で枝豆、焼き枝豆



<8月6日> AKT 秋田テレビ表敬訪問

8月6日、秋田日独協会法人会員である AKT 秋田テレビ株式会社への表敬訪問が実施されました。

パッサウ独日協会パルーザ会長、通訳千里さん、随員の添野会長、川村副会長、渋谷副会長の5人を、石塚代表取締役社長、石橋専務、進藤取締役の御三方が満面の笑みで出迎えてくれました。パッサウ市の歴

史、文化、市勢発展等につき大いに宣伝する機会を与えていただいたこの度の訪問。石塚社長はじめ役員諸氏には、感謝の念を捧げると同時に、今後の秋田ーパッサウ両市の日独姉妹都市交流につき、尚一層高い関心を払ってくれることを願ってやみません。

<8月7日> 記念写真展「Flow/Glow」オープニングセレモニー 於：文化創造館

姉妹都市提携 40 周年を記念した「芸術写真交流プロジェクト」として、前年の秋に秋田市在住の写真家草薙裕氏がパッサウを訪れ、またパッサウ在住の写真家 Klaus Ditté (クラウス・ディッテ) 氏が秋田市を

訪問しそれぞれの街を写真に納めました。秋田人が見たパッサウと、パッサウ人が見た秋田市、両市の街並みが集まった写真展「Flow/Glow」が開催され、多くの人が訪れました。



左より 草薙裕氏、アルミン・ディックルパッサウ副市長、穂積志秋田市長、クラウス・ディッテ氏



セレモニーの後、写真展オープン
開催期間：2024年8月7～19日

<8月7日> 姉妹都市提携 40 周年記念音楽コンサート 於：アトリオン音楽ホール



秋田市民合唱連盟による歓迎演奏
添野会長をはじめ、秋田日独協会会員も参加



管楽器五重奏団“バタバ・ブラス”と
アトリオン少年少女合唱団との共演

《川村誠副会長 “パッサウ独日協会名誉会員”》

2024年8月5日、“千秋亭”にて開催の「秋田日独協会主催パッサウ訪問団歓迎晩餐会」の席上、N. パルーザ・パッサウ独日協会会長より、長年にわたり「秋田市ーパッサウ市姉妹都市交流」にご尽力された川村誠副会長に「パッサウ独日協会名誉会員認定書」が手交されました。



《パッサウ市で写真展開催》

2024年8月に秋田市で開催された写真展「Flow/Glow」がパッサウ市でも開催されました。そのオープニング式典に出席された写真家の草薙裕氏からレポートを頂きました。

会員 草薙 裕

10月22日から28日までパッサウ市を訪問。写真展「Flow/Glow」がKulturmodellにて開催された。26日のオープニングでは、パッサウ市長、ミュンヘン副領事、パッサウ独日協会会員はじめ、約90名が

参加し、大盛況。また、パッサウ大学も訪問し、秋美大との学生交流のための写真ワークショップ開催の打合せを行い、今後の更なる活発な国際交流実現へ。滞在中はパルーザ会長からの心からの歓迎と多くの支援をいただき、1989年に秋田市よりパッサウ市へ寄贈した桜の樹の撮影や写真家のクラウドさんのご案内でボヘミアのルーゼンマウンテンなども訪問し、今回も貴重な多くの写真撮影が実現しました。



会場「Kulturmodell」の前にて



パッサウ大学教授 L. Barbara 氏と通訳の Zur さん

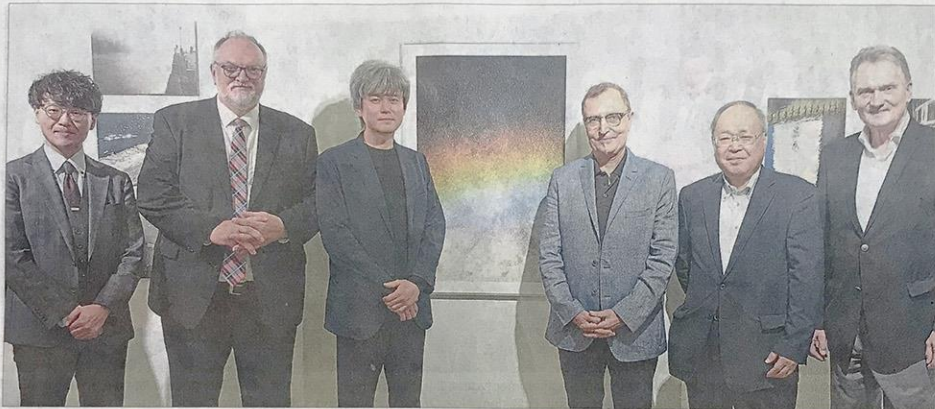
Wechselseitige Blicke auf Passau und Akita

Großer Besucherandrang bei Fotoausstellung der Deutsch-Japanischen Gesellschaft im Kulturmodell

Von Gabriele Blachnik

Wie alle Städtepartnerschaften lebt auch die Partnerschaft zwischen Passau und Akita, einer Großstadt im Norden Japans, vom gegenseitigen kulturellen Austausch. Im Rahmen von ihrem 40-jährigen Jubiläum hat die Deutsch-Japanische Gesellschaft Passau ein Fotoprojekt zu einem ganz besonderen Austausch verwirklicht: Der Fotograf Klaus Ditté besuchte von Passau aus Akita und der Fotograf Yu Kusanagi kam nach Passau, um die jeweilige Partnerstadt mit dem jeweils eigenen Künstlerblick einzufangen. Beider Sicht mündete in eine Ausstellung und einen Fotoband, der im fernen Japan bereits präsentiert wurde, während eine Reisegruppe aus Passau im August die Partnerstadt besuchte.

Nun hat der Fotograf Yu Kusanagi sich auf den weiten Weg nach Passau gemacht, um hier bei der gegenseitigen Ausstellungseröffnung dabei zu sein. Das städtische Kulturmodell bot dabei nicht nur den Fotowerken genügend Raum, sondern auch dem großen Besucherandrang bei der Vernissage. Aus Japan war mit dem Fotografen Yu Kusanagi sein Kollege Professor Matsunobu Nomura von der Kunstuniversität in Akita angereist, der auch Vorsitzender der Japanisch-Deutschen-Gesellschaft Akita ist. Bereits zum dritten Mal war Yusaku Ishizaki, der japanische Vizekonsul vom Generalkonsulat für Bayern und Ba-



Bei der Ausstellungseröffnung im Kulturmodell: Vizekonsul Yusaku Ishizaki (v.l.), OB Jürgen Dupper, die Fotografen Yu Kusanagi und Klaus Ditté und die beiden Vorsitzenden der länderverbindenden Gesellschaften in Akita und Passau, Matsunobu Nomura und Norbert Palsa. Sie umrahmen eine Fotoimpression aus Passau von Yu Kusanagi.

Foto: Gabriele Blachnik

den-Württemberg nach Passau gekommen. Oberbürgermeister Jürgen Dupper begrüßte neben den japanischen Gästen einige Kollegen aus der Stadtverwaltung und viele Vertreter des Passauer Kulturlebens. Dupper dankte der DJG Passau als „Motor der Städtefreundschaft mit Akita“ und lobte die „wunderbare Ausstellung“, die von der Stadt als „bleibendes Stück unserer Städtepartnerschaft“ aufbewahrt wird. Einige der gezeigten Fotografien hätten „das Zeug zur Ikonografie“, sagte das Stadtoberhaupt.

Yu Kusanagi konzentriert sich mit seinen Farbphotografen von Passau auf die drei Flüsse. Jede Farbe des Wassers drücke eine bestimmte Eigenschaft aus, sagte er mithilfe einer Dolmetscherin zum Publikum. „Strahlende Momente“ versuchte er einzufangen, was sich im Ausstellungstitel „flow/glow“ wiederfindet. Auf vielen seiner Fotografien fließen und glühenden Passauer Flüsse und spiegeln das Leben an ihren Ufern und Promenaden wider. Während Kusanagi Menschen in Passau als Teil der Stadt, dabei „in Harmonie mit der umgebenden Flusslandschaft“ darstellte, suchte Klaus Ditté

in Akita auch die direkte Nähe von Menschen, wobei viele beeindruckende Portraits entstanden sind. Seine Akita-Eindrücke sind durchwegs schwarzweiß, was ihnen etwas Zeitloses anhaftet, so die Mitkuratorin der Ausstellung Eva Riesinger.

Ein besonders berührendes Portrait hat Ditté an den Beginn seiner mehrere Themen umfassenden Fotoreihe gehängt. Darauf sind zwei kleine Buben am Meeresstrand zu sehen, die ihren Blick neugierig dem Himmel richten. Die Mutter der Zwillinge war dem Passauer Fotografen ein

wertvoller Guide durch Akita. Überhaupt sei er während seines zweiwöchigen Aufenthalts im Herbst 2023 bestens betreut worden, hatte zwei Fahrer und ein Fahrrad zur Verfügung, um von seinem Quartier rundum zu kommen. Auch bekam er ein Glöckchen zum Umhängen, wenn er sich nachts durch die Stadt bewegte, denn aus der umgebenden Wildnis kämen immer wieder Schwarzbären in die Stadt, erzählte Ditté. Die Natur wurde ebenso ein Motiv seiner Fotografien wie die Ästhetik städtischer Strukturen. Ein Großteil seiner Bilder, die er im Kulturmodell zeigt, sind

aber Portraits. In den Gesichtern vieler Menschen fing Ditté ein, was ihn nach seinen Worten besonders beeindruckte: die Freundlichkeit, Lebensfreude und Hilfsbereitschaft der Akita-ner. „Gib dein Bestes“ sei ein Motto, das er oft von ihnen gehört habe. Damit würden sie auch Taifunen, Erdbeben und Überschwemmungen trotzen.

DJG-Vorsitzender Norbert Palsa stellte kurz die Vita der beiden Fotografen vor. Yu Kusanagi wurde 1982 in Akita geboren und ist nach einem Kunststudium inzwischen als Assistant Professor an der Akita University of Art tätig. Für seine Fotoserien wurde er bereits mehrfach ausgezeichnet. Klaus Ditté (Jahrgang 1960) stammt aus Heilbronn und lebt seit 2009 im Raum Passau. Seit 1990 arbeitet er als freier Fotograf und zeigte seine vielseitigen Werkerleben in diversen Ausstellungen, zum Beispiel beim Kunstverein Passau. Oder in Publikationen, zum Beispiel zur Wildnis im Bayerischen und Böhmerwald. Zu Japan, dessen Kultur und Natur, fühlt er sich schon seit Jahrzehnten hingezogen. Von Ditté stammte auch die Idee zu dem nun in Passau gezeigten Fotoprojekt. Seine Akita-Bilder bringen den Passauer die Partnerstadt ein großes Stück näher. Und Yu Kusanagi Passau-Bilder zeigen die Dreiflüsse-Stadt, wie sie viele Passauer selbst noch nicht gesehen haben.

Die Ausstellung „flow / glow“ läuft bis 15. Dezember im Kulturmodell Bräugasse, geöffnet Mittwoch bis Sonntag von 14 Uhr bis 17 Uhr.

パッサウ新報記事 (2024年10月29日付)

《秋田市国際フェスタ 2024 に参加しました》

2024年9月1日（日）、秋田拠点センターアルヴェ 1階「きらめき広場」で「秋田市国際フェスタ 2024」（主催：秋田市、秋田市姉妹都市フォーラム）が開催され、秋田市の友好姉妹都市や秋田市在住の外国出身者の母国を紹介するブースが出展されました。



秋田日独協会も会員 5 人がドイツブースを担当し、パッサウの紹介に協力しました。

ブースでは、ドイツに行ったことがある人、行ってみたいという人との話に花が咲きました。



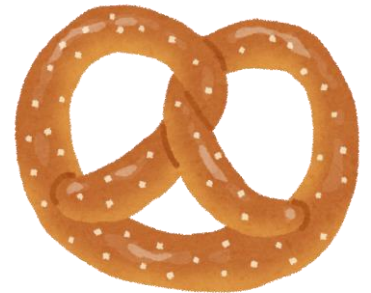
《2025 年度の予定》

2025 年

- 2月10日 会報（Nr. 16）発行
- 2月15日 新年祝賀会・記念講演会
- 7月中旬 定時総会・記念講演会
- 9月上旬 「秋田市国際フェスタ」参加
- 11月中旬 「外国人による日本語スピーチコンテスト」後援

2026 年

- 2月上旬 会報（Nr. 17）発行
- 2月 新年祝賀会・記念講演会



ドイツ語で格言・諺: **Wenn's am besten schmeckt, soll man aufhören.**

一番おいしい時に、やめよ。（腹八分目）

《編集後記》

今回はパッサウ姉妹都市提携 40 周年記念の特集号として交流の様態をたっぷりお届けしました。次の節目である 45 周年には秋田からパッサウへ訪問する番がやってきます。それに向けて今回高まった気持ちをさらに熱くできるような会報を通じて皆さんに情報をお届けしていきたいと思えます。

会員の皆さんからの寄稿やメッセージ、そして、ドイツに関する話題などを広く募集します。送り先は、表紙の事務局の住所へ、または、メールにてお送りください。

法人・団体会員

(株) 東北 i ツアーズ様
しんあくら (株) 様

(株) 秋田魁新報社様

(株) 日本旅行東北秋田支店様
野口裕子箏曲会様

(株) JTB 東北秋田支店様

秋田テレビ (株) 様